

## ま え が き

高層気象台長 林 則 雄

高層気象台彙報は、1923 年 (大 12) に第 1 号が刊行され、今号で第 67 号を数えるに至っている。創刊当初および近年は毎年 1 号ずつ発行されているが、第二次大戦中の 1942 年 (昭 17) に発行された第 12 号の表紙にはマル秘の朱印が押されている。このことから判るように、当時は気象観測データやその調査・研究の発表に自由はなくなり、その前後では発行されなかった年も多くなっている。このような困難な時代を乗り越え、本第 67 号においては、13 編の調査・研究報告が掲載されている。また、高層気象台職員のみにとどまらず、国内外の研究者との共著論文が増えていることも、今号の特徴の一つと言える。

国際地球観測年 (IGY : 1957.7~1958.12) に合わせ、当時としては世界的に見ても画期的、近代的な高層気象観測網を整備し気象学上の知見の飛躍的向上や天気予報の精度改善に貢献した、いわばわが国の高層気象観測の中興の祖ともいえる北岡龍海氏 (第 4 代高層気象台長) に、わが国の高層気象観測の創始者である初代高層気象台長大石和三郎先生から、戦後間もない時期にあてられた手紙の中には、「気象研究の基礎は精確な観測です」という一節がある。

これまでも精密な観測とその改良と継続を支える技術がなければ、大石和三郎先生のジェット・ストリームを発見も、また当台でオゾン観測技術を習得後、第 23 次南極地域観測隊員として昭和基地に派遣された忠鉢 繁氏 (現気象研究所) のオゾン・ホールを発見もなかったであろう。さらに、気象研究所などで開発される気候予測モデルや天気予測モデルに組み込まれる新しい理論やアルゴリズムの導出およびその裏づけにも精密な観測は欠くことのできないものとなっている。特に、天気予測のモデルにおいては、初期値となる高層気象観測データの正確さが、予測精度に大きな影響を与えることは言うまでもない。しかしながら、高層気象台が 1920 年 (大 9) に設立されたという「のれん」の古さに頼っているだけでは、組織としての存在価値を維持することができないことも確かである。あくまでも、常に職員が切磋琢磨し、時代のニーズに沿って高層気象台の役割を見直し、気象業務の改善を通して日々の天気予報から地球環境問題まで、国民の安全・安心に貢献できるものでなくてはならないと考える。

そのためには今後とも最新のリモート・センシング技術を含め、広大なフィールドも活かし、高層気象に関する測器の試験・改良を推し進めて精密な観測を維持するとともに、得られた調査・研究の成果を「高層気象台彙報」に掲載していくこととしたい。読者の皆様におかれては掲載内容をそれぞれの業務遂行の参考にしていただくと同時に、ご意見、ご批判をお寄せいただければ幸いである。さらにこのことを高層気象台の業務改善の糧とし、自然災害に対する国民の安全・安心の確保に資するよう、なお一層努めて参る所存である。

最後に、調査・研究の企画段階から緊密な連携を保ってきた気象庁本庁関係各位および論文の査読にあたっていただいた関係各位に感謝の意を表したい。